

## 鏡の中でアリスは歌う

風間順一郎\*

「夢の中へ」は井上陽水が初めて商業的に成功したとされる楽曲である。1973年の作品だ。この年のシングルの売上げ1位は宮史郎とびんからトリオだった。そんな時代にリリースされた「夢の中へ」では、あっけらかんとしたメロディーラインに乗って毒にまみれた歌詞が平然と歌い放たれ、リスナーに「なんだこれ？」と思わせる明るい狂気が満ち溢れていた。その不思議な違和感こそが、この曲を誰の頭の中にも残る名曲へと導いたのである。

斉藤由貴が「夢の中へ」をカバーしたのは1989年、オリジナルの発表から16年後である。まだ、オリジナルの余韻を強く心に留めるリスナーが生き残っていた時代、崎谷健次郎のポップでファンキーなアレンジには拒絶反応が示されることも多かった。オリジナルへのリスペクトがないと怒った人もいたことだろう。ところが、これを嘲笑うかのように、「なんだこれ？」と思わせる斉藤由貴バージョンの「夢の中へ」もまた、40万枚の売上げを誇る大ヒット作となったのである。

ここでいま、オリジナルの井上陽水バージョンを聴いてみよう。驚くほど普通である。1973年当時の「なんだこれ？」感は全くない。時代の変遷とともにリスナーの耳の経験値は上昇し、ちょっとやそつとの毒や仕掛けで動じることはなくなってしまったのだ。だから、1989年の段階で崎谷健次郎が「なんだこれ？」と思わせるアレンジに作り直したことは全く正解だった。オリジナルとは全然違う

---

\* 福島県立医科大学腎臓高血圧内科

色を出したことで、オリジナルのスピリットを正しく継承したのである。

なお、この斉藤由貴バージョンも、2021年の現代に聴き直してみると、まあ普通である。だから今、「夢の中へ」のスピリットを正しく継承する曲は存在しない。あの「なんだこれ？」感を現代に蘇らせるためには、さらに相当ぶっ飛んだリアレンジが必要だ。そんなことができる奇才の出現を待つしかあるまい。

ルイス・キャロルは、「鏡の国のアリス」の中で、赤の女王に「It takes all the running you can do, to keep in the same place（その場にとどまるためには全力で走り続けなければならない）」という名文句を吐かせている。同じ曲をそのまま歌い続けるばかりでは、オリジナルのスピリットを失ってしまう。だからリスペクトすべき先人の業績も、これをリスペクトするからこそ、あえて壊し続けなければならない。透析医療もまた然りである。